

# らいいプラス

顔面の骨は体の骨のなかでも比較的折れやすい。スポーツの最中に相手と接触したり高年が酔っぱらって転倒し顔をぶつけたりとすると、骨折することがある。比較的多いのは鼻で、頬などが続く。典型的な骨折の事例と治療を紹介する。

顔面の骨は鼻骨、頬骨(きようこつ)、上顎骨、下顎骨、前頭骨などで構成する。鼻骨などの周辺には上顎洞や篩骨(しごつ)洞といった空洞があり、周囲の骨も薄い。

こうした構造は脳を守るためと考えられている。外部から力が加わると、顔の骨が壊れて緩衝の役割を果たし、脳を保護するという。顔面骨折の治療に取り組んでいる杏林大学医学部形成外科・美容外科の尾崎謙講師は「顔の骨はクッションのようなもの」と説明する。

顔面骨折で一番多いのは鼻の骨折だ。杏林大学医学部付属病院を訪れる顔面骨折患者の約半数は鼻骨骨折で、若い男性が圧倒的に多いという。鼻骨は鼻のうち、目頭あたりから約3分の1までだが、鼻は顔の中で飛び出ているのでぶつけやすい。バスケットボールやラグビーといったス



骨折部位	特徴
鼻骨	顔面骨折で最も多い。原因は運動やけんかなど。腫れが治まってから切開しないで治療。約1カ月で治る
頬骨	転倒やけんかなどで骨折。しびれが生じやすい。プレートで折れた骨を保持する。完治には約3カ月かかる
下顎骨	転倒などが原因。開口障害やしびれ。上下のあごを固定するほかプレートで骨を保持。完治には約3カ月必要
上顎骨	転落や交通事故など大きな外力が加わり骨折。脳挫傷を伴うなど重症度が高い

## 顔面骨折に注意



### スポーツでの接触・酔って転倒…

スポーツで相手の肘や頭などが当たったり、誤って転倒したりしたときに傷める。

大学生のCさん(仮名)はラグビーをしているときに相手選手の頭が鼻にぶつかった。鼻血が出て、鼻が腫れてしまい、杏林大付属病院に運ばれた。

#### 鼻で全身麻酔も

腫れがひどいと、外観だけでは鼻骨が折れて変形しているのかわからないことがある。そこでコンピュータ断層撮影装置(CT)などを使って調べる。「骨折していたら患者さんと相談して治療方針を決める」(尾崎講師)

通常、治療は1週間前後経過して腫れが引いてから実施するが、切開手術はしない。痛いので全身麻酔をかけて、はさみのような形状の鉗子(かんし)を鼻の穴に挿入し、折れた骨片をはさんで元の位置に戻す。

さらにガーゼで鼻の穴の内側に塞ぐ。当落球運動をするときに鼻をぶつけるのを防ぐため、鼻の骨が折れたら、鼻の骨を元の位置に戻す。

眼窩内 けんかやボールが奥の目に入ると、眼窩内に骨折が起きる。数週間か月の間に、眼窩内の骨が折れる。

## 鼻・頬に続き下あごも 後回しは禁物 増す治療負担

側から固定(内固定)する。鼻の外側は石こうのギプスなどで覆い、保護する。杏林大の場合、通常は2〜3日で退院する。運動を控えれば約1カ月で治る。

鼻骨の次に多いのが頬の骨折だ。スポーツのほか、自転車や転倒したり、けんかで殴られたりすると、頬の出っ張りの周辺などが折れる。腫れていても、頬がへこんでいるのが分かるという。痛むほか、鼻の横や上唇、歯茎にしびれを感じ、口も開けづらい。

CTなどで調べて全身麻酔をし、修復固定術を実施する。口の中、上あごの粘膜や目の下などを切り開き、折れた骨を元の位置に戻す。その際、折れた骨を保持するために小さな固定部品を使う。「プレート」と呼ばれ、細長くて薄く、チタン製が多い。プレートは折れた骨に小さなネジなどで留める。患者は3日から1週間ほど入院。3カ月ほどで完治する。

若者から高齢者まで幅広い年齢層にみられるのが下あごの骨折だ。30代の男性Dさんは飲酒後、駅の階段で転倒し、下あごを強く打った。あごから出血し、腫れた。CTとレントゲンを撮影して調べたところ、下あごの中央と左右の耳の近くを骨折していた。

治療の基本は顎間固定とプレートによる固定だ。顎間固定は上と下のおごがきちんとかみ合うように上と下のおごを金属製の器具やワイヤ、輪ゴムなどを用いて固定すること。軽症ならば顎間固定だけで治る。

期間中は流動食 顎間固定を施している間は、流動食しかとることができない。尾崎講師は「下顎骨の骨折は食事に影響を及ぼすので、手術をしない選択肢はない」と説明する。もう一つのおごである上顎骨の骨折はあまり多くない。この骨は交通事故や高所からの転落など極めて強い力が加わった場合に折れる。脳などを傷めることもあり、重症度が高い。

目の辺りも骨折する。眼窩(がんか)内骨折と呼ばれる。野球のボールがぶつかったり、けんかで相手のパンチを受けたらすると、眼球が収まっている眼窩の鼻側の骨(眼窩内壁)や下側の骨(眼窩下壁)が折れる。

特に眼窩下壁は「厚さが1〜2mm程度。まるで紙のような骨」(尾崎講師)だ。まぶたが腫れて痛むほか、気持ちが悪くなり、吐き気を催すことが多い。CTで患部を調べ、眼球の動きもチェックする。治療は症状にもよるが、まぶたの下を切開し、腰の骨を一部採取して挿入した下壁の下敷きとして挿入し、その上に折れた骨片を還元する。

元 気 ナ ビ

(編集委員 鹿見島昌樹)